

# 多義的発話について

岡田 聡 宏

## 1. はじめに

発話解釈において、聞き手は最も労力の少ない方法での処理を目指しながら、コード化された文の意味を拡充してエクスピリカチャーを復元し、インプリカチャーのレベルにおいてその文の意味を補い、相手の伝えている意味を求めようとする。この発話解釈の過程は、関連性への期待が充足された時点で終わり、それ以上は継続されることはない。

### (1) Relevance-theoretic comprehension procedure

- a. Follow a path of least effort in computing cognitive effects: Test interpretive hypotheses (disambiguations, reference resolutions, implicatures, etc.) in order of accessibility.
- b. Stop when your expectations of relevance are satisfied.

Wilson & Sperber (2004: 13)

つまり、多義的な語の一義化、指示付与やそれ以外の拡充を経てエクスピリカチャーを復元し、インプリカチャーの復元も通して相手の伝えようとしている意味を解釈し、関連性への期待が満たされた時点で発話解釈を終了するのである。また、以下の引用において述べられているように、関連性の期待を満たす最初の解釈が唯一の解釈であり、それ以上の解釈があるとは考えられない。同等に関連性が高いと思われ、いずれが意図されたものか判断に困るような複数の解釈を含む発話は、その処理に必要な以上の労力がかかるため関連性が達成されないのである。

- (2) It is also reasonable for the hearer to stop at the first interpretation that satisfies his expectations of relevance, because there should never be more than one. A speaker who wants her utterance to be as easy as possible to understand should formulate it (within the limits of her abilities and preferences) so that the first interpretation to satisfy the hearer's expectation of relevance is the one she intended to convey. An utterance with two apparently satisfactory competing interpretations would cause the hearer the unnecessary extra effort of choosing between them, and the resulting interpretation (if there were one) would not satisfy clause (b) of the definition of optimal relevance.

Wilson & Sperber (2004: 14)

引用中の 'clause (b) of the definition of optimal relevance' とは、相手に自分の言いたいことを伝えるために、できるだけ相手が理解しやすいような方法で最も高い関連性を持つ発話を行うということである。したがって、分かり易くするために、自分の能力の許す限り最も適切な表現を用い、紛らわしい言い方はしないということである。しかし、発話の多様性を考えると、一つの発話に複数の解釈が含まれるものも少なからずあり、関連性の枠組みでこれらの発話が如何に解釈されるか、そのプロセスを明らかにする必要がある。例えば、和歌の掛詞や、秀句やしゃれには、伝達者によって意図される二重あるいは複数の意味が含まれ、伝達意図の強弱によるが、これらの発話解釈には、二重の意味を読み解くことが求められる。本稿の目的は、このように二重の意味の込められた和歌やしゃれの例を通して、多義的な発話が関連性の原理に基づき解釈される仕組みについて明らかにすることである。

## 2. 関連性理論

Wilson & Sperber (2004: 16) が 'Relevance theory treats the identification of explicit content as equally inferential, and equally guided by the communicative

Principle of Relevance, as the recovery of implicatures.’ と述べているように、インプリカチャーのみならずエクспリカチャーも関連性の原理に基づき、推論によって同定されると関連性理論では捉えている。エクспリカチャーの同定には、コード化された意味の解釈と指示付与 (reference assignment)、複数の意味を持つ語の一義化ないし意味の決定 (disambiguation) が行われるが、発話解釈は真偽判定可能な最低限の命題を復元することに止まらない。以上の指示付与や一義化の過程に加えて、語や句などの意味を狭めたり、広げたりすることによって文脈に合致した概念をつくるアドホック概念の形成なども重要な役割としてエクспリカチャーの復元の過程に含まれる。このように推論によって、アドホック概念形成を含めた語句の意味の拡充が行われ、話し手が伝えている意味を聞き手は解釈しようとするのである。つまり、聞き手は、関連性の原理に基づき、認知効果を最小の労力で得られるように、以上に挙げたプロセスを経て発話解釈を行い、関連性への期待が充足された時点でその解釈を止めるのである。さらにこの発話解釈のプロセスにはインプリカチャーの復元も含まれ、インプリカチャーがエクспリカチャーと平行して復元され、話し手の伝えている意味が得られる。

- (3) a. Constructing an appropriate hypothesis about explicit content (in relevance-theoretic terms, EXPLICATURE) via decoding, disambiguation, reference resolution, and other pragmatic enrichment processes.
- b. Constructing an appropriate hypothesis about the intended contextual assumptions (in relevance-theoretic terms, IMPLICATED PREMISES).
- c. Constructing an appropriate hypothesis about the intended contextual implications (in relevance-theoretic terms, IMPLICATED CONCLUSIONS).

Wilson & Sperber (2004: 16-7)

つまり聞き手は、例えば、論理形式の復号化、エクспリカチャーの形成、インプリカチャー形成のような順序で発話解釈を行うのではなく、エクспリカ

チャーとインプリカチャーは相互に調整されながら平行して復元が行われるのである。次の例を通して、発話解釈の過程を確認したい。

- (4) a. Peter: Did John pay back the money he owed you?  
b. Mary: No. He forgot to go to the bank.

Wilson & Sperber (2004: 17)

ピーターの関心はジョンが借りたお金を返さなかった理由にあるため、メアリーの発話はその理由を説明することで関連性を達成する。まず論理形式のレベルでは、bank が BANK<sub>1</sub> (銀行) であるか BANK<sub>2</sub> (土手) であるかが決定されていないが、借りたお金を返さなかった理由を期待するこの状況では、次のような想定をたやすく得ることができ、これがインプリカチャーを導くための前提 (implicit premise) として機能する。

- (5) Forgetting to go to the BANK<sub>1</sub> may make one unable to repay the money one owes.

エクспリカチャーに関しては、論理形式が拡充され BANK<sub>1</sub> を含む ‘John forgot to go to the BANK<sub>1</sub>’ が同定される。さらに、この暗示的前提 (5) と明示的な前提 (エクспリカチャー) から次のインプリカチャーを結論として得る。

- (6) John was unable to repay Mary the money he owed because he forgot to go to the BANK<sub>1</sub>.

さらにこのインプリカチャーから、例えば「今度銀行に行ったらメアリーに借りたお金を返すかもしれない」のような、弱いインプリカチャーも得ようとする。

以上のように論理形式の復号化からインプリカチャーとエクспリカチャーの復元および相互調整を経て相手の伝えようとしている意味を解釈しようとする

る。この解釈過程はかなり単純化されたものであり、実際には、語彙項目化された BANK<sub>1</sub>（銀行）という意味がより厳密な BANK\*「リテールバンク」などの概念にまで狭められたり、ATM を含む BANK\*\*まで広げられるなど、アドホック概念が形成される可能性がある。

(1) および (2) の引用で示したように、例えば BANK などの語の一義化を行う場合、エクスプリカチャーとインプリカチャーの相互調整を通して、最もアクセスしやすい意味である BANK<sub>1</sub>の意味を語彙項目の中から選ぶ。もし関連性への期待が満たされた場合、その時点で一義化の処理は終わり、他の意味を求めようとはしないのである。しかし、和歌の技法から駄洒落を含む洒落に至るまでの様々な発話形式において、1つの語や句が2つ、あるいはそれ以上の意味を伝えたりするようなことが一般に行われている。『百人一首』に収録されている歌数首の分析を通して、複数の意味を持つ表現の処理プロセスについて考察したい。

### 3. 多義的発話について

#### 3.1. 和歌の多義性

まずは、藤原公経（入道前太政大臣）の歌に用いられている掛詞について考えてみたい。

(7) 花さそう 嵐の庭の 雪ならで ふりゆくものは わが身なりけり

「花さそう」という表現や、雪に類似した色を持ち、散り方が雪の降り方に似る桜の花を表すアドホック概念「雪\*」から、「ふりゆく」は「雪などが降る」の意の「降りゆく」が選ばれる。次の「雪ならで」という否定的な言い方と、「わが身なりけり」という表現から、「年をとってゆく」ことを表す別の語の意味「古りゆく」が導き出される。これにより「降りゆくものは雪\*ではなくて、古りゆくものはわが身なのだった」という二重の意味が得られる。この場合、前者の「降りゆく」の意味が否定・排除されるのではなく、「古りゆく」の意味と共に保たれる。和歌では字数の制限があるため、その制限の中で複雑な意味を表す

ために掛詞という技法が生まれたのかもしれないが、このような制限の中でたとえ労力が掛かるといっても複数の意味という効果を求めるのは自然な処理プロセスであるように思われる。「花」（桜を指すアドホック概念とも言えるが、語彙項目化された意味と考えることができる）と「雪\*」のあるコンテキストで、作者がわざわざ「ふりゆく」という表現を用いていることから、聞き手の関連性への期待は「古りゆく」の解釈だけでは満たされず、「降りゆく」の解釈も排除せずに得ようとするのである。確かにこのような解釈には労力はかかるが、和歌の伝統という制限の中では、もっとも効率的に複雑な意味を伝えることのできる、つまり最も関連性の高い発話であると言える。掛詞というのは、処理労力を要するため、一義化される語に比べると語（句）の意味は明示的ではないが、作者によって相対的に強く伝達される意味である。次の歌は小式部内侍の歌であるが、この歌にも掛詞が含まれている。

(8) 大江山 いく野の道の 遠ければ まだふみもみず 天の橋立

小式部内侍の歌が母親の代作ではないかとの噂に基づき、藤原定頼が母親の文を持った使者が間に合うかと小式部をからかった際にこの歌を詠んで返答したものである。「母親が丹後に住んでいる」、「生野は大江山から天橋立までの丹波路の道中にある」などの想定からいく野の道は「生野の道」、つまり生野へ通ずる道であると容易に解釈される。また、もう一つの意味「行く野の道」も同時に解釈され、「大江山を越えて生野を通して行く野の道」という多重的な意味が復元される。さらには、「丹波への道のりは長い」、「踏みは橋の縁語である」などの想定から「まだ踏みもみず」の意味が得られる。また、「道のりが長ければ、母親からの文をみることはできない」、「丹波への道のりは長い」、「藤原定頼が母親の文を持った使者について聞いている」などの想定から、まだふみもみずが「まだ文もみず」の意であることも解釈する。また、「まだ天橋立を踏んでいないなら／文をみていないなら、母親からの使者は間に合わない」などの想定から結論として「使者は間に合わない」というインプリカチャーも復元される可能性があり、その場合エクスプリカチャーとの相互調整によって小式部が伝

えている全体の意味が解釈される。この歌に必要とされる処理プロセスは前掲の藤原公経の歌のものと同じで、労力をかけて高い効果を得るものと考えられる。

(9) このたびは ぬさもとりあえず 手向山 紅葉の錦 神のまにまに

朱雀院、つまり宇多上皇が吉野の宮滝まで足をのばした宮滝御幸の際に菅原道真がよんだ歌である。もしこの御幸に関する情報が想定として得られなければ、このたびを「この旅」と解釈することは比較的難しくなり、読み手によっては、「この度」のみの意味に一義化して解釈するかもしれない。強く伝達されるかどうかは、伝達者の意図にかかっており、例えば前の2首では伝達者の伝達意図は強く、掛詞の二重の意味を理解できなければ、伝達者の伝える意味を理解したことにはならない。これに対して、この菅家の歌では、伝達意図の強さが前掲の2首ほど明白ではないように思われる。したがって、「この旅」も意図されていると考えられるが、もしこの部分を復元できなくても解釈の失敗とはならないと思われる。いずれにせよ、伝達者による伝達意図の強弱次第で、受信者がどこまで解釈するかが決定され、関連性への期待が充足された段階で受信者は解釈を終える。『百人一首』からは最後に、大伴家持作とされる歌をみてみたい。

(10) かささぎの 渡せる橋に おく霜の 白きをみれば 夜ぞふけにける

「かささぎの渡せる橋」をアドホック概念と捉えることも可能であるが、かささぎの橋は「陰暦7月7日の夜、牽牛星と織姫星とを会わせるため、鶴が翼を並べて天の河に渡すという想像上の橋」（『広辞苑』）と辞書にも記載されているように、天の川に架かる想像上の橋を指す語彙項目化された意味であるとも考えられる。また、「宮中も天上界に通ずる場所である」などの想定から「かささぎの渡せる階（はし）」つまり宮中の階段をもう一つの意味として解釈することができる。この階の概念も、天の川を用いて宮中を天上界になぞらえたメタ

ファー、つまりアドホック概念と捉えることが可能であるが、またその一方で、「宮中の御階」（『広辞苑』）として辞書に記載されているように語彙項目化された意味と捉えることも可能である。Sperber & Wilson（2006）に基づき、岡田（2007:68-69）でも「一般にメタファーと考えられているものも字義的な発話も表によって示されているように完全に同じ過程で解釈されるのである。人によってコード化されている概念が異なる場合があるとも考えられるが、字義的な発話もルースに用いられている発話も同じプロセスで解釈されるため、この点は全く問題にはならない」と主張しているように、意味がコード化されていても、コード化されていなくても解釈上のプロセスは同じであると考えられるため、個人によるコード化の差は問題にはならない。いずれの場合でも、「かささぎの渡せる橋」は、天の川に架かる伝説の橋と宮中の階とを二重に示していると考えられる。また、「霜の白さが目立つ時は、冬であり、気温も著しく低くなっている（地表面付近の気温が氷点下となっている）」とか「空が澄んで、星の光が冴え渡っている冬の夜は、非常に寒い、もしくは非常に寒く感じる」などの想定や、この歌の後に続く、「夜ぞ更けにくる」から「深夜は、冬の寒さもいっそう身にしみる時間帯である」などの想定から例えば「冬の深夜、星が夜空にさえ渡り、霜の白さが際立ち、気温が著しく低下し、凍てつく寒さが身にしみる」などのインプリカチャーが得られる。さらには、霜と階、または天の川の美しさに関する弱く含意されるインプリカチャーも復元されるかもしれない。この例の解釈においても、エクスプリカチャーとインプリカチャーの相互調整が行われ、最終的な意味が導かれるものと考えられる。また効果と労力の関係についても、他の例の解釈と変わらず、この例にも同様のことが当てはまると言える。つまり、高い処理労力が要求されはするが、複数の意味が導き出されることによって高い効果が得られ、最終的に高い関連性が達成されるということである。

### 3.2. しゃれ・秀句

3.1.において『百人一首』の掛詞を中心に、多義的な意味を持つ表現が一義化されることなく、二重の意味を表し、インプリカチャーの復元も通して、全体



の意味が伝えられることを説明した。次に、しゃれや秀句の例を通して、これらの発話解釈にも掛詞と同じプロセスが適用されることによって、掛詞同様、二重の意味が伝達されるということを示したい。

単純化して考えれば、秀句もしゃれ（だじゃれ）も掛詞と同様に同音異義を利用して語句に2つ以上の意味を持たせるものである。例えば、次の例をみてみよう。

- (11)「大般若の櫃の中をよくよく搜したれば、大塔宮はいらせたまはで、大唐の玄奘三蔵こそおはしけれ」とたはむれければ、兵皆一同笑つて、門外へぞ出にける。」『太平記』

大塔宮護良親王が、追手の兵から逃れるため般若寺の経櫃の中に身を隠す。大塔宮は、3つの櫃の内、蓋の開いている櫃を選び経典の下に隠れるのである。追っ手の兵は「蓋開きたる櫃は、見るまでも無し」と他の櫃を探し、大塔宮の櫃は探さずに寺から出る。大塔宮はまた寺内に戻ってくるのではと、兵がすでに探し見た櫃に入り、兵が戻るのに備える。果たして、兵たちは仏殿に立ち戻り、「前に蓋の開きたるを見ざりつるがおぼつかなし」と、宮の隠れていた櫃を探し、この秀句を言うのである。この兵の発話で、「大塔（宮）」と「大唐（の玄奘三蔵）」が対比されているが、これも同音異義を利用したものである。この発話でもし必要な情報のみ伝えたいのであれば、「経典のみにて大塔宮はいらせたまはず／おわさず」などで十分である。これもやはり、労力を要求することによって滑稽さや諧謔などの効果を得ようとしているものと考えられる。伝達者の伝達意図にもよるが、掛詞では二重に示される意味の両方が（等しくとは言えないが）重要な情報を伝えるのに対し、秀句などの場合は諧謔性を伝えるのが主な目的となるので、例えば「大唐」の意味そのものよりも、「大塔」との発音の一致を認識することが重要になってくる。秀句やしゃれでは、対立する語の意味の情報性自体よりも同音性の認識や、2つの同音語同士の意味の隔たりの認識が重要であり、その認識が諧謔へとつながる一因となっているのかもしれない。

さらに、『日本語のしゃれ』（鈴木棠三）の「シャレことば」の中に収録されている次の例をみてみよう。

(12) 白犬の尻尾 おもしろい

ある対象について「おもしろい」という情報のみ伝えたいのなら、「面白い」と言えば足りる。そういう意味では、「白犬の尻尾」の部分は不要であるとも言える。しかし、話し手が敢えて「白犬の尻尾」と言っているからには、そこに関連性があると聞き手は考える。もちろん関連性という概念を想起する訳ではなく、そこに相手の伝えたい意味があると考えるのである。「白犬の尻尾」の部分は、「おもしろい」を導入するための仕掛けのようなものとして機能している。つまり「おもしろい」のもう一つの意味「尾も白い」を導き出させるために、わざわざ労力のかかる「白犬の尻尾」という表現を使っているのである。犬の尾が白いこと自体に意味的重要性があるのではなく、同音異義の表現を対立させることによって諧謔性を生み出しているのである。次の例も同じく『日本語のしゃれ』（鈴木棠三）からの引用である。

(13) 谷中の不作 しょうがねえ

ただ何かが「しょうがない」という意味を伝えたいのなら「～がしょうがない」と言うだけで十分である。やはり前述のしゃれと同様に、「谷中の不作」の部分は「しょうがねえ」を導入するために敢えて呈示された表現である。「谷中\*」はメトニミー的にアドホック概念として「谷中生姜」を指す。あるいは「谷中（地名）が不作ならば、谷中生姜がとれない」という前提から「谷中生姜がない」が導き出されるとも考えられる。いずれにせよ、「谷中の不作」という表現を通して、「しょうがねえ」のもう一つの同音語である「生姜ねえ」を想起・対立させ、諧謔という効果を生み出しているのである。ここでも、生姜がないことの情報性よりも、諧謔性の伝達を目的として発話されているのである。

「白犬の尻尾」や「谷中の生姜」の部分は同音異義語を想起させるための仕掛

けのようなものとして機能すると述べた。確かにその分の処理労力がかかるが、同音異義語を対立させ滑稽さを生み出すことによって、関連性に貢献しているのである。見方を変えて、もし「白犬の尻尾」や「谷中の生姜」の部分のみ呈示したらどうなるだろうか。たとえば、何かおもしろいことがあり、「それは白犬の尻尾」と発話したり、何かしょうがないと思われることについて、「それは谷中の不作」と発話した状況を考えてみる。このような状況では、「尾も白い／面白い」や「生姜ねえ／しょうがねえ」を導き出す想定へのアクセスが難しくなるため、解釈し得ないか、解釈し得ても労力分の効果を得ることはできなくなるかもしれない（詳細は後述するが、これも状況によると考えられる）。「おもしろい」や「しょうがねえ」の部分もいわゆるなぞかけの答えを予め呈示することによって、処理労力を減じていると言えるのかもしれない。それでも労力のかかる表現であることは確かなことなので、最小の処理労力で必要な情報のみが要求される諧謔が求められないような状況では、このような発話は不適切となる。したがって、このような発話がなされるのは、諧謔などが受け入れられるようなコンテキストに自ずと限定されてくると思われる。しかし、換言すれば、諧謔が受け入れられるような時間的余裕のあるコンテキストでは、処理労力をかけても諧謔という高い効果を解釈として聞き手は得ようとするのである。

最後に、サツマイモについてよく言われる「くりよりうまい じゅうさんり」という表現について考察する。「くりより」の句には「栗より」と「九里四里」の意味が含まれている。また「九里四里」の「九里」の部分は、焼き芋の別称である「八里半」を指す。この点については説明が必要であるが、江戸時代に焼き芋の看板に八里半と謎掛けをして売ったところ大いに売れたということである。つまり九里に少し満たないところから栗に近い味であるという意味である。謎掛けというコンテキストでは、難易度はそれぞれ異なるが、難解な謎があり、そのところを読み解くという状況ができあがる。したがって、受け手は、労力を覚悟でそのところを読み解こうと努力し、それが解けた段階で目的が達成される。この場合、ところを読み解くということが目的であり、その情報を得ることで関連性が達成されると思われる。しゃれにも謎掛けの要素が含まれ

るものがあり、そのような例では、労力が掛かることが初めから想定される。「くりよりうまい」の「九里」にも「八里半=焼き芋」の意味を含む「九里」に加えて「栗」という意味が込められている。さらに、「より」の部分は、比較の対象を示す格助詞「より」と共におそらく「四里」の意味も込められていると思われる。この例では、伝達意図の強さがやや明白ではないので、少なくともこの部分に関しては、比較的弱く伝達されていると言えるかもしれない。しかし、「九里」と「四里」を足せば「十三里」になりその分おいしいと解釈することが可能である。

#### 4. おわりに

Wilson & Sperber (2004) の 'BANK' の例で示したように、多くの発話では、一義化の作業が行われて、多義的な意味を持つ語の意味が決定される。また、一義化が行われた段階で、関連性への期待が満たされ、他の意味を探ることはない。しかしながら、これまでに和歌の掛詞、秀句およびしゃれを用いて例証してきたように、一義化で終わるかという問題はコンテキストによると考えられる。伝達者の伝達意図の強弱によるが、掛詞では、二重もしくは、多重的な意味が一つの語に込められている。したがって、一つの意味を求めただけでは、関連性への期待は充足されることはなく、もう一つの意味を探ろうとする。この場合当然ながら労力は掛かるのであるが、二重の意味という効果を得ることによって関連性が達成される。この点は、秀句やしゃれにも当てはまることで、秀句やしゃれにおいても話者が一つの語に二重の意味を込めているために、その復元が聞き手に求められる。聞き手も労力を覚悟で、一見不必要に見える表現から関連性を期待し、諧謔という効果を得る。また、しゃれには謎掛けの要素を含むものもあり、謎掛けというコンテキストにおいて、労力を覚悟でそのところを読み取るという目的、つまり関連性を達成しようとするという点についても最後に詳細を記した。一つの意味しか伝達されていない場合は一義化が行われるが、伝達者が二つもしくはそれ以上の意味を一つの語句に込め、それを伝達しようとする意図を示している場合、受信者は関連性の原理に基づき、その複数の意味を求めようとするのである。最後に、岡田 (2007) で

考察した芭蕉の俳句の例を通して、発話の多義性についての考察を締め括りたい。

(14) 田一枚植ゑて立去る柳かな

この句における「立去る」の解釈について、ここでも触れたい。「立去る」の主語は、統語論的省略ではなく、文脈から語用論的に拡充され、早乙女が、田を植え終えてから「立去る」と解釈される。芭蕉の伝達意図が強くないので、もう1つの主語に関する解釈は、聞き手に委ねられているが、芭蕉も主語として「立ち去る」に掛かっていると考えられる。「田一枚植ゑる」という表現から時間の経過をインプリカチャーとして読み取る。さらに、「田植えが終わるまでの長い時間、田植えの様子を眺めていた」ことから「芭蕉は、田植えに興味を持っていた」などのかかなり弱いインプリカチャーに加えて、西行に関する想定も用いることによって、「西行ゆかりの柳のもとを立ち去るのが名残惜しかった」などのインプリカチャーも回復されるのではないか。これらのインプリカチャーとの相互調整によって、芭蕉が西行ゆかりの柳を名残惜しげに「立去る」という解釈が得られるのである。伝達意図が比較的弱いため、読み手によっては芭蕉が立ち去るとは考えないかもしれないが、この句について精通した読み手は、主語として早乙女を補うに止まらず、芭蕉をも補いエクスピリカチャーを完成させるのではないだろうか。もちろん、この処理プロセスも関連性の原理に基づいたものであり、関連性への期待が満たされるまで解釈が続けられ、その期待が充足された時点で終了するのである。

## 参考文献

- Carston, R. (2002a) 'Metaphor, ad hoc concepts and word meaning - more questions than answers'. *UCL Working Papers in Linguistics* 14. 83-105.  
Carston, R. (2002b) *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit*

- Communication*. Blackwell, Oxford.
- Grice, P. (1991) 'Logic and conversation'. In S. Davis. (ed.) *Pragmatics*. 305-315. Oxford: Oxford University Press.
- Sperber, D. and D. Wilson. (1991) 'Loose talk'. In S. Davis. (ed.) *Pragmatics*. 540-590. Oxford: Oxford University Press.
- Sperber, D. and D. Wilson. (1995) *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- Wilson, D. and D. Sperber. (2000) 'Truthfulness and relevance'. *UCL Working Papers in Linguistics* 12. 215-257.
- Wilson, D. and D. Sperber. (2004) 'Relevance theory'. Available at: <http://www.phon.ucl.ac.uk/home/deiredre/papers.html> (In L. Horn & G. Ward (eds.) *The Handbook of Pragmatics*. 607-632. Blackwell: Oxford.)
- Wilson, D. and D. Sperber. (2006) 'A deflationary account of metaphor'. *UCL Working Papers in Linguistics* 18. 171-203.
- 岡田聡宏 (2008) 「レトリック再考」『言語・文化・社会』第6号 63-84
- 鈴木棠三 (2007) 『日本語のしゃれ』 講談社
- 鈴木日出男 (2006) 『百人一首』 筑摩書房
- 東森勲・吉村あき子 (2003) 『関連性理論の新展開 認知とコミュニケーション』 研究社
- 久富哲雄 (2006) 『おくのほそ道』 講談社

# The Recovery of Multiple Meanings

OKADA Toshihiro

Relevance theory treats the identification of explicature or explicit content, as equally inferential as that of implicature or implicit content. Explicature is recovered via decoding, disambiguation, reference assignment, and other pragmatic enrichment processes. Words containing multiple meanings, for example, are reduced to one meaning through a disambiguation process, which is guided by the Principle of Relevance. Once his expectations of relevance are satisfied, the recipient will stop searching for further meanings. However, there are language uses where the recipient is required to recover multiple meanings, and his expectations of relevance will not be satisfied until these intended meanings are identified. *Kakekotoba* and *share*, for example, have been traditionally used in Japanese societies to communicate two or more meanings by exploiting homonyms or words with the same sound but with different meanings. *Kakekotoba* and *share* cause an increase in processing effort by requiring the recipient to recover two or more meanings intended by the communicator, but this extra effort is outweighed by a gain in cognitive effects. The interpretation of these utterances is also guided by the Principle of Relevance, as with other utterances, and the recipient can achieve relevance through the recovery of multiple meanings, which offsets the extra processing effort required.